

引き揚げの記



藤崎須美子



著者略歴

大正2年5月12日 兵庫県須磨に生まれる
 京城師範附属小学校卒
 京城第一高等女学校卒
 東京在住中、昭和14年結婚
 大連、新京に居住
 現在、夫婦とも健在、一男一女の母

引き揚げの記

頒価(送料とも)一五〇〇円

昭和五十八年八月十五日 発行

著者 藤崎 須美子

東京都調布市深大寺町二四八〇
 郵便番号一八二・電話〇四二四―八二―一四一九

制作 主婦の友出版 センタースタッフ

東京都千代田区神田駿河台一―六
 郵便番号一〇一・電話〇三―二九四―一一一

印刷・製本 三和印刷株式会社

■ 引き揚げの記

序

重 村 力

私は随筆の専門誌を担当していたということで、近鉄の文章教室の講師になった。受講者の自己紹介があったが、この書の著者・藤崎さんは、終戦後、満州から引き揚げてきた。その体験をまとめたい、とテーマがはっきりしていた。

「引き揚げの際、京城をトラックで通過しましたが、私は外の景色を見る気がしませんでした。じっと足もとを見つめていました」

という。最近韓国旅行が盛んだ。誘われもしたが、行く気にはなれない、ともいう。藤崎さんは京城の師範附属小から、京城第一高女で学んだ。この女学校の名前と藤崎さんの年配を考え、私の従姉・碓井喜美子をご存知ないか、と聞いてみた。

「碓井さんとは同じクラスで、机を並べたこともあります」

それを聞いた私は、親近感をおぼえるとともに、これを機会に『引き揚げの記』のまとまるのを願った。

文章教室は毎週、書いたものを複写し、皆で批評し合う。藤崎さんは一篇だけではなく、二篇、三篇も書いてくることもあった。清書した原稿がたまってゆく。

前途は真暗、子供ばかりか、親も泣きわめく人がいる。こんな極限状態が何度もあった。藤崎さんは年老いたご両親と子供二人を連れている。その上、その団体の会長を勤める羽目になる。痛ましいことには何度も出会うが、鎮南浦で父が逝く。やっと火葬に付すが、母は、骨はもちろん灰までもかき集める。この地に灰ひとつ残して行きたくなかったのだ。

どんな状態になっても、藤崎さんはたじろがない。若さと、心身ともに健康ということもあつたろうが、強い平衡感覚と生命力がそうさせたのであろう。

「書きまとめたものを、当時幼かった二人の子に読んでもらいたい」また「発行日を八月十五日にしたのは、平和な道を歩んでもらいたいからだ」と願っている。

「心の中をぜんぶ話してしまつたら気が楽になりますよ」と同行の女性を力づける場面があるが、この言葉は、いまの藤崎さんにもあてはまる言葉といえよう。この著で言いたいことは全部言ってしまった。すると、心のしこりも解け、気が楽になったにちがいない。

京城（ソウル）に行ってみたくなる日も近いことであろう。

（筆者・元随筆サンケイ編集長、現近鉄アカデミア武蔵野の文章教室講師）

目次

序

重村 力 2

第一章 大東亜戦争前夜

一 日米戦争はじまる	11	一〇 向井伯母の来満	30
二 大連での生活	13	一一 母との再会	32
三 新京へ転勤がきまる	15	一二 夫に召集令状	34
四 新京にて	18	一三 疎開することに決める	36
五 長女の出産	20	一四 疎開の準備	38
六 子守りの千恵さん	22	一五 新京駅にて汽車を待つ	40
七 野菜作り	24	一六 空襲警報の中を貨車に乗る	42
八 防空演習はじまる	26	一七 南下する避難列車	45
九 知らぬは国民ばかりなり	28	当時の満州・朝鮮略図	17

第二章 鎮南浦にて

一 終戦の放送をきく……………	49	一五 ソ連兵の横暴(上)……………	77
二 会長の役を引き受ける……………	51	一六 ソ連兵の横暴(中)……………	79
三 新京に連絡……………	53	一七 ソ連兵の横暴(下)……………	81
四 北緯三十八度線……………	55	一八 燃料……………	83
五 幼い博幸ちゃんの死……………	57	一九 煙草(上)……………	85
六 九死に一生を得た思い……………	59	二〇 煙草(下)……………	87
七 幼い子らに病氣蔓延す……………	61	二一 無抵抗主義……………	89
八 ジフテリアによる死亡激増……………	63	二二 鎌で草刈り……………	91
九 オンドルでの生活……………	65	二三 工場主の家に雇われる……………	93
一〇 シューバー(上)……………	67	二四 ネクタイ……………	95
一一 シューバー(下)……………	69	二五 池のある庭……………	97
一二 父の最期……………	71	二六 マラリア?……………	99
一三 火葬許可証を受ける……………	73	二七 庭の草取り……………	101
一四 使役に出る……………	75	二八 リンゴの籠編み(上)……………	103

二九 リンゴの籠編み(中)……………	105
三〇 リンゴの籠編み(下)……………	107

三一 出発を前にして(上)……………	109
三二 出発を前にして(下)……………	111

第三章 日本内地に向け出発

一 河原で休憩……………	115
二 けわしい山道を行く……………	117
三 三人の情けが身にしみる……………	119
四 たんぼの畦道……………	121
五 牛車の進む道……………	123
六 星空を仰いで……………	126
七 三十八度線を前にして……………	128
八 川を渡る……………	129
九 北緯三十八度線を突破……………	131
一〇 議政府へ行く……………	133
一一 夜空に炎は高く……………	135
一二 生きている……………	137

一三 議政府出発の前夜……………	139
一四 京城の町を通る……………	141
一五 仁川埠頭にて……………	142
一六 仁川での思い出……………	144
一七 仁川埠頭に別れをつげる……………	147
一八 貨物船にのる……………	148
一九 船のなか……………	150
二〇 三日目に佐世保の沖へ……………	152
二一 下船を前にして……………	154
二二 いよいよ上陸……………	157
二三 佐世保の宿舎にて……………	159
二四 紙幣の交換……………	161

二五 引き揚げ列車は東京へ……………	163	三〇 上野駅にて……………	172
二六 車窓にうつる日本の山河……………	165	三一 再会……………	174
二七 派手な着物をきた京都娘……………	167	三二 果たした約束……………	176
二八 静岡駅のホームで……………	169	三三 夫との対話……………	178
二九 東京につく……………	170	三四 夫の引き揚げの様子……………	181

第四章 引き揚げ後

一 混乱のなかの買い出し……………	185	八 社宅の人たち……………	199
二 達夫、小学校へ入学……………	187	九 同じ社宅の和枝ちゃん……………	201
三 父のふるさと金沢へ……………	189	一〇 母危篤のしらせ……………	204
四 父の納骨……………	191	一一 母の面影……………	206
五 兄、戦死の公報……………	193	一二 亡き母に会う……………	208
六 兄とフィリッピン戦線……………	195	一三 母の思い出……………	210
七 社宅に引き移る……………	197	一四 仙台にて思うこと……………	212

あとがき……………

第一章

大東亞戰爭前夜

一、日米戦争はじまる

日本、大東亜戦争に突入！ 新聞の大きな活字が目にとび込んできたのは、昭和十六年も終りに近い十二月八日、私たちは大連の光風台のアパートにいたときだった。

日本がいよいよ大国アメリカを相手として、戦争にふみ切った。内地では赤紙一枚で若い男性は応召して行く、と人の口の端にのぼり不安だった。

大資本国のアメリカと戦い「日本魂」がそれに打ち勝てると軍部は思い上っているのだから、とても不安にかられ夫と話しあった。日本はこの先きどうなるか？ わかりもしないのに、興奮してしゃべっていた。

私は十四年に結婚して東京から大連にきた。夫は満州興業銀行に勤めていた。十六年一月には長男の達夫が誕生し、育児について相談する人もなく失敗もしたが、それが一つの体験となつてつぎの子育てにとりくんで行くことができた。

戦争だといっても、町のようすは別にかわることもなく、緊張した空気も感じられずのんびりしたものだった。品物は豊富で、不自由はなかった。ロシア人がまい朝焼いているおいしいパンをよく買いに行った。

大連の目抜き通り、浪速町には大きなデパートや店が軒をつらねていた。星ヶ浦には別荘

が海に面した高台に、満鉄の寮もあった。避暑地として外人をはじめ多くの人がきて賑わっていた。とても広々としたよいところで、ここは外地だなあ！ という気持が自然に湧いてくる、どことなく垢ぬけた感じがする。

旅順が近く、よく夫につれられて出かけた。「旅順開城約なりて……」の有名な歌とステッセル、乃木両將軍の銅板彫りもあった。

父が満鉄に勤務して大連にいたので、結婚したての私たちに、なにかと世話をし、便宜をはかってくれた。東京をはなれるときは淋しい思いをしたが、だんだん楽しいまい日を過ごすようになっていた。母は東京でお手伝いと二人暮らし、その家の近くに長兄夫婦がいるので安心していった。東京に較べずとのびのびした環境だ。

夫は幼いときに父親が、ついで数年後母も亡くなり、叔父、叔母に育てられて大連に住んでいた。銀行の社宅で赤煉瓦造りの家はいまでも残っていた。

その後、夫は叔父の転勤で天津について行ったが、中学のとき大連に一人で帰り下宿して大連一中に通学していたので、街のようすはすみずみまでよく知っている。私はゆっくり見物する暇もなく、子育てに追われる日々が続いた。

広々とした街並み、以前父は東京へ帰ると、「日本は狭いなあ、大連はいいなあ！」といつては母や私をなんとなくいやな気持にさせていたが、きてみると「ほんとうだ！」父の言葉

がそのまますつと受け入れられるような気がしてきた。

二、大連での生活

きょうも家のすぐ下の道を、中国人が紅玉リングのいっぱいはいった籠を前後に、天秤棒でユラユラさせながら売りにくる。

安くてとてもおいしくよく買った。いつのまにかおなじみになり、ニコニコした幼い顔で二階を見上げ、大きな声をかけてくる。まだ残っているのに、つられてつい買ってしまふ、とてもものんびりした風景の一コマだ。

家の前から電車にのると終点が老虎灘ろうこたんで、ちょうど星ヶ浦とは反対の方向だ。歩くとすぐ岸壁につく。さっそく長い釣竿をおろし釣をしたのしんだ。経験のない私がまぐれで三尾ほどの収穫があり、鼻たかだかとして帰ったこともあった。

長男の生まれたその年の夏、母は孫の顔を見にはるばる東京からやってきた。その元気なようすにおどろいた。

以前いっしょに生活しているときは、体も弱くねたりおきたりのまい日だった。心まで弱くなった母は、年ごろの私に結婚話があっても、なんとか文句をつけてことわってばかりいた。手ばなしはなくなかったのだろう。

兄は支那事変で出征していたが、東京へ帰還後母を説得、私は縁あって藤崎家へ嫁いだのだ。数カ月後、兄も結婚して天津へ、母は淋しかったと思うがかえってそれが幸いして、心身ともに強くなったのだと喜んだ。

大連のあちこちを一応案内したのち、母に留守番をたのみ二人してテニスにでかけた。夫は運動はなんでもできた。私はテニスだけだが、ともに楽しむものがあるのはとても幸せだ。銀行のテニスコートには誰もいない。久しぶりに立つエンドライン！ 力強く打ってくる白球！ 硬くはったラケットのガットにはねかえる手の感触！ 懐しいものに出会ったように、しばらく夢中で楽しんだ。

京城の第一高女時代、練習試合にはよく勝ったが、市のコートでする本試合には負けたものだった。朝鮮の人の観客は対抗意識が激しく、日本女学生にとばすヤジの物凄さ！ いつも上ってしまう。でもテニスは好きなので、学校、官舎のそばのコートでおそくなるまでしていた。

数日後、母は天津に行き兄夫婦の歓待を受け、満足しきって大連に戻ってきた。義姉の小さいときから世話をしていたお手伝いが、天津にもついていき、赤ん坊の世話から、家事の一切をしていたそうだ。

外地で、三井物産勤務なので、外人とのパーティーが多く、兄夫婦は二人してよく出かけ